

神は愛

－その哲学的アプローチ－

Doctor Jean-Luc Berlet

内容目録

創世記

第一章：プラトン哲学におけるエロスの役割

第二章：東洋哲学における神の両極性

第三章：キリスト教における神の愛

第四章：キルケゴール哲学における神の愛

第五章：今日に至るまでの女性的神概念

黙示録

創世記

「私は遅くにあなたを愛した、美はあまりにも古くそしてあまりにも新しい、私は遅くにあなたを愛した。あなたは私の内におり、私は私自身の外にいたのだから。」

——アウグスティヌス

「神は愛」疑いもなくこの3文字は、かつてないほどの最も美しい文を構成する。皮肉なことにこの愛なる神という名において、歴史上非常に多くの血が流されてきた。その故に、この「神は愛」という文の意味を可能なかぎり明確にすることが本小論の目的である。ここでは、「愛の神」という概念について哲学的アプローチを取り上げていくことにする。狭い視野を避けるために、世界の諸文化における神の概念や愛の概念について説明する必要がある。そこで本小論では、プラトンから東洋思想、キリスト教、キルケゴールの哲学を経て、現代の女性神的思潮までを取り上げることにする。当然、そのような広いトピックを論ずるのに他の多くの方法を取ることも可能であったかもしれないが、長くなりすぎないよう私にとってより意味のある方法を選択したしだいである。

愛なる神という概念は確かに詩的なようではあるけれども、実のところ、非常に論理的な概念である。愛なる神の存在を信じるのがいかに論理的なことであるかを理解するために、かつて問われてきた中で最も重要な形而上学上の問題を考えてみる必要がある。それは、「なぜ無よりもむしろ何らかの事物が存在するのか。」という問題である。この問題は、18世紀にドイツの哲学者ライプニッツによってはじめて問われた。20世紀の最も有名なドイツの哲学者であるマルティン・ハイデッガーは、そのような根本的な問題を問うのにそんなに長く人類は待たなければならなかったことに驚いた。当然、そのような深く難解な問題に対する明白な解答はないだろう。それでもやはり、その問題に対するより論理的な答えとして、愛の源が存在するゆえに何らかの事物が存在するのだと言われなければならない。実際、愛の最も論理的な定義は、無の存在への移行である。愛がなければ、何ものも決して存在することはできない。したがって、何らかの事物が存在しているという事実が愛の神のようなものが存在するという証明である。創造はそれ自身、愛の作用である。愛がなければ、芸術は存在しない。かつてアウグスティヌスは宇宙の創造について説明するために、神と芸術家とを類比させた。いずれにしても、神は芸術家が名作を創造するのと同じように世界を創造した。そのような類比を通して、神は単なる巨大なコンピューターではなく、より深く愛に満ち溢れた心情的な存在であることを理解することができる。ビッグバンは、おそらくそのような神の愛の爆発だったのであろう。

第一章：プラトン哲学におけるエロスの役割

「人間の魂が、子供の時から、これらの美徳の種子を運んでくる時、この神的な人間は、ふさわしい時期がくれば、生みたいという願望を感じず。彼はまた、美が生み出すいたるところに行き、見出すのである。。。」

——プラトン

プラトンは、キリスト教のみちぞなえをした最も偉大なギリシャ哲学者として知られている。言うまでもなく、精神主義者としてプラトンはキリスト教の哲学的基礎を整えた。プラトン哲学とキリスト教とのつながりが否定できないとするならば、その差異も軽視すべきではない。正確には、プラトン哲学の愛の概念がこの重要な差異に属している。プラトンにとって愛は、肉体的であれ精神的であれ、美と密接に結びついている。プラトンによれば、愛は受けるべきものであり、したがってそれはイエスの教えにおけるような無条件の愛ではあり得ない。愛は、翼のついた赤ん坊のように描写されているエロスという神からくる。もちろんプラトンは、神話の描写以上のことを論じている。しかし、「饗宴」という愛についての対話編において、エロスはプラトンの論述のためのいい出発点である。

プラトン哲学におけるフィロス (Philos) とエロス (Eros)

philosophy (哲学) という語は、それ自身とても興味深いものである。この語はプラトンに非常に影響を与えた有名な数学者であり神秘主義者であるピタゴラスによってつくられた。Philosophy とは、知の女神、ソフィア (Sophia) に関連して、知への愛という意味である。ソフィアは、ビーナス (Venus) という女神のライバルであり、両者はとても美しいのであるが、それは全く異なった方向においてである。ソフィアは高貴で、どこか冷たい美の化身であるのに対し、ビーナスは、魅惑的でむしろかなり「熱情的な」美の化身である。ソフィアは人々の尊敬を鼓舞するのに対し、ビーナスは人々の強い欲望を呼び起こす。ギリシャ語で「フィロス」(Philos) とは、知性的な愛という意味であるのに対し、「エロス」(Eros) とは官能的な愛の具現である。しかしギリシャ精神には、犠牲的な愛というようなものはない。犠牲の愛を意味する「アガペー」(Agape) は、最初ギリシャ人によってキリスト教に改宗させるために考案された語である。。。

精神主義哲学者として、プラトンはエロス、すなわち肉体への愛よりもむしろフィロス、すなわち真理への愛を強調する。それでもしばしば言われているように、プラトン

は肉体的な欲望を悪として拒絶するような禁欲主義的観点を支持しているのではない。実際は、プラトンは肉体的な愛よりも精神的な愛により高い価値を置いているということであり、肉体的な愛は、第一義的な愛である精神的な愛に到達するための道であり手段であるところの第二義的な愛である。これはプラトンが有名な愛についての対話編「饗宴」の中で展開した天才的な概念である。この対話編は、愛の神エロスの名において催された宴会で構成されたものである。プラトンによれば、エロスは愛の引き付ける力によって、実在のどんな正反対の局面もすべて統合するような非常に強力な神である。男性と女性とが性的に引き付け合う力は、ただひとえにエロスの統括的な力の明確な現れである。プラトンの師であるソクラテスは、そのような赤ん坊として描写され、それでいて力強い神というパラドックスを強調している。。そのパラドックスは何とすてきな概念だろうか。神は愛でありながら力の神であり、その力は神の謙遜からくるものである。キリスト教はそのようなプラトンの教説の中に、神が非常にへりくだったつつまじやかな場所で生まれた赤ん坊に顕現したというキリストの降誕を見出した。

プラトンによれば、エロスは美への愛を経てフィロスへと到達していく。美しい肉体を愛することを経て我々は、魂の美、知の美、そして最終的に神自身の美というように、少しずつより高次の美へと到達できる。プラトンによれば、ギリシャ人全般でも言われているように、美は真や善とつながっている。美が我々の魂を救済から遠ざけてしまうという概念は、古代ギリシャ人にとってナンセンスなことである。プラトンは、性的欲望は神に由来するものであり、いわゆるイデア界における美、真、善の観想への霊的、精神的欲望に到達するためのすばらしい道である手段であると信じていた。性交せずに相手を愛するといういわゆる「プラトニックラブ」(platonic love)も、性愛を「哲学的愛」(philosophical love)へと転換させる道として考えられる。神は愛であるがゆえに、愛の内部に分裂はあり得ず、ただある種のヒエラルキーがあるだけである。これがギリシャ社会が性の解放に対して非常に寛容であった理由の一つである。プラトン自身は同性愛を支持していたが、彼が結婚しなかったとはいえ同性愛者であったかどうかははっきりとはわからない。それでも、「饗宴」の終わりで、愛が可能となる最も美しい定義を与えてくれる人は、ディオティマ(Diotima)という賢明な女性であるとされている。おそらくこの言及の中に、同性愛が性愛の最良の道ではないというプラトンの意識を読み取ることができるのではなかろうか。

ギリシャ人およびプラトンの美への崇拜

古代ギリシャは、美への崇拜の国であった。ギリシャ神話のユニークな点は、神々のすべてが善であるとは限らないとしても、すべてが美しいということである。プラトンは、美と善のそのような分離を不道德の根源であるとして好まなかった。ギリシャ彫刻

の主題は、美男美女に神々を描写することである。エジプトやインド神話では、神々はしばしば半分動物の姿をしたもの(half animals)として描かれているのに比べれば、ギリシャ神話は人間の意識の重要な進歩を示していると主張することができる。神が自身の像に似せて男性と女性を創造したならば、神を可能な限り最も美しい男性と女性として描写することは非常に論理的なことである。実際、宗教の創始者たちはすべてハンサムな男性として描かれている。プラトンは、芸術に対しては非常に批判的であったにせよ、そのような美への崇拜ということに対しては全く同意している。プラトンによれば、芸術はイデア界に属する真正の美の単なる幻想的な模写にすぎない。少なくとも、実存する人間は、そのような霊的・精神的な美の直接の像である。それゆえ人間は愛されるに値するのである。もしソクラテスがもっとハンサムであったらおそらくアテネで死ぬほどの迫害を彼は受けなかったのではなかろうか。

プラトンは、美は善を表すとはっきり言及していた。したがって、プラトンは、美を愛することを通して我々は救われ得ると信じていた。この概念を理解するために、プラトンの想起説に触れる必要がある。プラトンはある種の墮落によって世界に悪がもたらされたと信じていた。彼は、魂の物質への墮落という有名なギリシャ神話について言及している。元来、人間はイデア界の美、真、善を観想するただ霊的な存在であった。ところが墮落後、魂は物質という「泥」の中に埋もれてしまい、イデア界の思い出を失ってしまった。それでも他に比べて泥の汚れの少ない魂もあり、その魂は美に直面して本来の完全さのある程度は思い出すことができる。プラトンにとって哲学者は、以前の生活である霊的生活での記憶を取り戻すことのできる選ばれた魂である。これがプラトンの想起説である。イデア界の永遠の本質の中で、美は驚くべき明るさのゆえに想起へと向かわせる唯一のものである。哲学者が美に出会う時、それはたいてい人間の美であるが、その哲学者は強い興奮状態を抱くようになり、霊的な翼が伸びていくような感覚を抱くようになる。。しかしこの美の経験は、元来の真と善を再発見する前の第一歩にしぎない。この点においてプラトン哲学には実際に、美への愛による救済があると言うことができる。

プラトンの愛による救済のビジョンは、何年にもわたって西洋思想に大いに影響を与えてきた。プラトンがいなければパウロもアウグスティヌスも、世界の美の中に愛なる神の明確な実在証明を見出すことはできなかったであろう。またプラトンは、ロマン主義の伝統にも影響を与えてきた。ロマン主義の愛は実際、プラトンの愛に非常に近い。ロマン主義ではプラトン主義と同じように、肉体の美は魂の美に至るための必要なステップとみなされるからである。それでも両者の違いは、プラトン主義では我々が相手を愛する時、その相手の美ゆえに愛するのに対し、ロマン主義では我々の愛が我々が愛する相手を美しくするという点である。プラトンの美による救済についての観点に最も近

い観点を持っている人はおそらくロシアの作家ドストエフスキーであろう。ドストエフスキーは美が世界を救うであろうと宣言した。彼の著作では明らかに、美がつねに最後には救済をもたらしていく。ドストエフスキーの小説では神の愛はたいてい愛の心をもった美しい女性を通して表現されている。ドストエフスキーの著作ではどんな悪も美しい女性には見られない。正教徒としてドストエフスキーは、悪魔の美というカトリックの概念を絶対的に拒絶するのである。

参考文献：Plato, The Banquet - Ralph Waldo Emerson, Plato

第二章：東洋哲学における神の両極性

「空は生き続け、地は存続する。
それらを存続せしめるものは何なのか。
それらは自分自身に向かわない。
これがそれらを存続せしめるものである。」
——老子

東洋精神では神という名は使われないが、しかしそれは神の概念が欠如しているということの意味するのではない。仏教や神道あるいは道教のような東洋の宗教はむしろ汎神論的であり、神性と自然が統合している。これらの宗教にはみな神性の本質的な両極性という深い直観がある。社会組織はアジアでは非常に男性的であるのに対し、通常、東洋精神は女性的であることに注目することは興味深い。例えば日本では、神道の女性的な美と平穏さがサムライの秩序の男性的な闘争精神に適切な調和をもたらしたように思われる。

中国哲学の独創性

中国の宇宙論は、道(Tao)の概念という、生命を可能にする宇宙の未知の原理を展開した。道(Tao)は、陰(Yin)と陽(Yang)という2つの相補の実体によって構成されており、道の根本的な両極面の一面を各々表している。陰は空であるのに対し陽は満であり、陰が暗ならば陽は明であり、陰が冷であるならば陽は熱であり、陰が水であるのに対し陽は火であり、陰が凹であるならば陽は凸であり、陰が女性的であるのに対し陽は男性的である。当然、陰陽論によって扱われる二元的特性のペアは他にももっとたくさんある。そのような両極性は、精神と物質との二元性を排他的に展開してきた西洋思想には見られない。アリストテレスのエイドス(eidos)とハイレ(hyle)の理論では、エイドスがハイレを支配するという精神的原理のヒエラルキーを明確に立てた。その結果として

アリストテレスは、思惟の思惟としての非常に知性的な神の定義をおいた。キリスト教哲学は中世においてアリストテレスの理論に厳密にしたがった。しかしキリスト教はイエスは神の顕現であると信じるので、神は男性的な存在であると即座に結論づけたのである。キリスト教神学者たちは、旧約聖書の創世記の中で神は自身の形に似せて人間を男と女とに創造したと言われていたことも即座に忘れてしまった。これは神は男性と女性の両方の特性をもつ存在であることをはっきりと意味しているのである。それにもかかわらず、創世記の人間創造についての第二の記述では、神は男を寝かせた後、男の骨の一部から女を創造したとも言われている。これが、一神教で男性の支配力を正当化する理由の一つである。

中国哲学では、神について語られなかったとしても、道(Tao)が男性と女性の両方の特性を持つという概念は、神の正しい理解に実に重要なことである。そのような両極性がなければ、いかにして神が真に愛の神たり得るだろうか。しかしこの中国の宇宙論は最終的に紀元前5世紀の孔子や老子を経て2つの論争上の観点にいきつく。孔子はより社会的な方向に道(Tao)の概念を展開させたのに対し、老子は自然の方向によりそれを発展させた。古代中国の社会秩序は男性勢力によって支配されていたので、孔子は道(Tao)の意味を社会的な位置や格位に適応させた。儒教では陽の原理は天と、陰の原理は地と結びついており、そこには幾分、陽が優位となるヒエラルキーが含まれている。道教にはそのような類いのヒエラルキーは存在しておらず、そこでは陰陽のペアは同等であり水平の位置に置かれている。孔子と比べて老子は、当時の社会秩序を乱すような革命的思想家であった。これが中国において儒教が道教より優勢に立った理由である。言うまでもなく、男性を天、女性を地と定めることが、前者の方が後者よりも優れているとみなされるべきだということを意味するのではない。しかしむしろ心理的観点では、天は地よりも高名であることは非常にはっきりしている。それゆえ私は、道教の陰陽の両極性の視点の方が、儒教の視点よりも道理にかなっていると考える。真の愛はただ厳密な平等性にもとづいてのみはじめて循環できるものである。しかし平等性は同一性という意味ではない。男性と女性は、肉体的にも心理的にも霊的な面においてさえもお互い違っている。

陰陽論と神の愛

陰陽の美しいシンボルを、お互いに衝突し合っているテニスボールか2滴の水の滴のように考えれば、生の最高の本質を実現することができる。このシンボルは、多様における統一、相違における相似を示している。陰には陽の部分もあり、陽にも陰の部分がある。陰と陽との関係はつねに動的である。重要なことは、陰と陽との正確なバランスを見出すことである。このことは、宇宙的レベルから性的レベルを経て個体的レベルにいたるまで、生のあらゆる局面にとって貴重なことである。このバランスが陰と陽の間

に見出される時、調和と幸福が現れる。重要なことは、陰と陽のエネルギーが平和に共存することである。陰陽論は、非常に多くの人間の活動に影響を与えてきたし、今日ますますその真価が認められてきている。例えば中国の医学や中国の栄養学、格闘技や風水等があげられる。

イエズス会の宣教師たちが 17 世紀、中国で道の概念を発見した時、彼らはこの概念を自分たち自身のカトリックの神の概念と同一視した。もちろん、道と神とをそのように同化させることはあまりにも唐突であり簡潔すぎることである。道は未知で、触知できない、非人格的な原理であるのに対し、キリスト教の神は愛と力の存在である。それでも、そのイエズス会士の「誤り」は、彼らの無意識のうちの願望から引き起こされた非常に興味深いものである。知性的なキリスト教徒として、イエズス会士は、神人同形論的なカトリックの神観に決して同感することはできなかった。それゆえ中国の道の概念の抽象的な点が好まれた。道や陰陽の概念は、同等な水平面で神の二元性を表現する非常に便利な方法である。道が神であるとすれば、陰は神の女性的側面であり、陽は神の男性的側面であると言えることができる。道の内なる陰と陽の運動は、神の内なる女性的側面と男性的側面の間の愛の運動になぞらえることができる。

タントラ教における神に至るための性的方法

愛の神として、神は生殖のためだけでなく、人間の喜びのためにも性を創造した。生殖のためなら、どういうわけか自然界には例えば性的特徴として細胞分裂で繁殖していくようなものもあれば、それ以上に単純な方法もある。しかし動物界のものとは違って、人間の欲望は生殖期間だけに関係しているのではない。これは神が人類に美しい愛の贈り物として性の喜びを与えたという明らかな証拠である。さらに深く分析してみれば、男性と女性との性関係には、霊的な目的があることがわかるだろう。霊的には、男性と女性との性愛は、神の男性的特性と女性的特性との深い交わりと考えられる。このことはこれからタントラ教を通して説明したい点である。

インドの宗教では神々はずねに一組の男女として描写される。ヒンズー教の寺院ではシバ神が妻のシャクティ神と愛し合っている美しい彫刻が見られる。インド神話から生まれた宗教の中で、性の霊的な意味の概念を特に発展させたのはタントラ教である。タントラ教によれば、男性的であるとともに女性的である神が、宇宙的な性関係を通して世界を創造した。神の像に似せて事物が創造されたので、唯一、男性と女性が愛によって結ばれて初めて神の完全な似姿になることができる。男性と女性が性的交わりを通して一つになる時、それはあたかも彼らが自分たちの姿に似せて世界を再創造しているかのようなのである。このような理由で、タントラ教では、性関係は非常に重大な問題であっ

て軽率に考えられるべきものではない。男性と女性は、自分たちが神に至るにふさわしい性関係をもてるようになるまで自分たちを清めなければならない。通常、求められる霊的および肉体的基準は非常に厳しいものなので、強い意志をもってそのような宗教に入れる人は誰もいない。歴史上、60年代のヒッピー運動は、西洋の若者たちが、ドラッグやセックスへの強い欲望と霊性への要求とを調停する方法をネパールで見出せるという非常に間違った考えをなしたものであった。多くの西洋の若者たちは、キリスト教の罪から逃れて性の解放を容易に得ようとカトマンズ（ネパールの首都）を歩き回っていた。実際は、タントラ教の神に至る性的方法は、西洋人にとって克服するのに容易ではないような厳しい禁欲的な準備が必要であることを意味しているのである。

参考文献 : Jean Granet, The Chinese Thought- C.G Jung, Psychology of Kundalini - Julius Evola, Metaphysics of sex

第三章：キリスト教における神の愛

「互いに愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。」

——パウロ

「神は愛」これはキリスト教の教義の核心である。そしてイエスは人生の一つ一つにこの神の愛を現した。イエスは神の息子であることを自覚して、人類に父の子女への犠牲的な愛の模範を示した。実際、キリスト教における神の愛は、正確には、父の子女への愛である。これは美点であると同時に、キリスト教的な愛の限界でもある。キリスト教ではユダヤ教と同様に、神は明確に、女性的パートナーのように被造物と関わる男性的な神として描写されている。

神の父なる愛

ユダヤ教徒たちは、神の国を建てる為にカナンという祝福された国へと自分たちを導いてくれる男性的な救世主（メシア）を待望していた。それで彼らは神を男性的な存在として崇拝していたのであり、その神の愛は時には非常に激しいものとして表現された。イエスは神の愛のより平和的なビジョンをもたらしたのであるが、それでもイエスもまた非常に激しい時もあった。実際イエスは、子女に対する父のようにふるまったのであ

り、人々にとても献身的に仕えたのであるが、必要な時には彼らの誤りを正そうとしたのである。キリスト教の愛は、倫理的な原理原則にもとづいた縦的な愛である。この愛は父の愛であるがゆえに、完全な愛の表現ではあり得ず、母の愛も統合されるべきものである。当然、キリスト教のこの女性的な愛の欠如を埋めようとする努力は多く成されてはきた。しかし現実の女性における実際の愛の顕現がなければ、キリスト教はそのような神に属する母の愛を正確に現わすことは決してできない。父の愛は神のみ言に対する服従や倫理法則に対する遵守にもとづいたものである。そのような愛は救済には絶対に必要ではあるが、人間の心を満たすには十分なものではない。人類が完成するためには父の愛と母の愛の両方が必要なのである。

実際、キリスト教は歴史的に、実の母のいない家族のように発展してきた。私の意見では、これはカトリック教会のあらゆる逸脱の主要原因である。キリスト教は勇気や犠牲、そして時には復讐とさえいったような戦闘的な価値による男性的な文化を基盤にしていた。許しという「女性的」な概念は時とともに失われ、キリスト教はローマ帝国で迫害されていたように、だんだん他宗教を迫害するようになった。十字軍や宗教裁判、魔女狩りのような教会の一層劣悪な罪はひとえにそのような母の愛の欠如の結果である。宗教裁判の審判官でさえ、神の愛の名において異端者を殺すと主張した。キリスト教的神の父の愛の限界はイエスの愛の表現を通して明らかである。実際、イエス自身は単に男性であって女性ではないので、神の愛を完全に表現できたわけではなかった。創世記によれば、神は自身の姿に似せて男性と女性の両方を創造したとされている。いくら完成した男性であったとしても、一人では神の姿を完全に現すことはできない。イエスの愛のすばらしい美を否定することがここでの私の目的ではない。しかし愛がつねに福音書での道理や意志の問題であるということが事実であれば、どこか違和感を感じる。イエスは神と他者を愛するための道理を示す。当然、イエスはそのような愛の模範を示した。しかしそのような愛にはどこか違和感がある。これは男性の愛が義務感、正義感により一層関係しているように思われるのに対し、女性の愛はより自発的でありのままのようであるという問題である。おそらくユダヤ人たちも他者をとりわけ敵をも愛するためのそのような道理を受け入れるように楔で留められていたのかもしれない。

キリスト教の女性的愛の探求

多くのキリスト教徒たちは自分たちの公式の宗教には、このように神の女性的な愛が欠如していることを感じていた。これが中世においてキリスト教国の大衆的な文化が非常に多くの民間伝承を生み出した理由である。これらの民間伝承の中で最もポピュラーなのは、円卓の騎士の物語である。イギリスでアーサー王伝説に関連してつくられたこの物語では実際女性に神的な役が与えられている。ここでは長くなるので物語り全体を

伝えることはできない。ただこの物語が神の女性的特性を持ち出した方法を言及するにとどめておきたい。アーサー王は彼の最良の騎士たちに聖杯を持ってくるように命じた。それはイエスが最後の晩餐で用いたという盃だと考えられている。私の知る多くの解釈者たちによれば、聖杯は実際、神の愛を顕現した完成した女性のシンボルである。実際、盃がどこか女性の子宮に似ているので聖杯は理想的な女性をデザインした非常にロマンティックなシンボルである。。。。ところで、女性はこの聖杯への探求において重要な役割を果たす。アーサー王の部下の中で最も偉大な騎士であるランスロットは、この探求に失敗してしまった。なぜならランスロットは女王、すなわちアーサー王の妻と恋に落ち姦淫をしてしまうからである。最終的に、神的な女性たちの助力で聖杯へと至るのは最も純潔な騎士であるギャラハッドであった。

また中世の有名なケルト伝説としてトリスタンとイゾーデがあげられる。トリスタンはコーンウェル・マークという王に仕える騎士である。王は理想の配偶者を探し、ふさわしい人に出会えるよう神の啓示を待っていた。ある日、一羽の鳥がマーク王のところにある女性のブロンドの髪の毛を運んできて、マーク王はすぐにこの髪の毛の持ち主が選ばれし女性であるとわかった。マーク王はトリスタンにこの神秘的な女性を見つけ出して無事にマーク王のところに彼女を連れてくるように命じた。トリスタンは多くの障害を乗り越えてそのブロンドの髪の毛の美しい持ち主であるイゾーデを見つけることができた。しかしイゾーデは、イギリスの南西部にあるアイルランド王国というコーンウェル・マーク王の敵国に属していた。したがって、イゾーデは、敵国の王であるマークに自分を捧げるためにトリスタンについていくことを拒否した。トリスタンが使命を果たすことができるように魔女が、イゾーデがマーク王と恋に落ちるための恋薬を調合してくれていた。しかし不運なことに、誤ってその恋薬を飲んでしまい、美しいイゾーデに激しく恋に落ちたのはトリスタンであった。また、トリスタンがイゾーデの生命を救ったがゆえに、イゾーデもまた許しのシンボルのキスをして、トリスタンと深く恋に落ちた。マーク王はすぐそのトリスタンの裏切り行為を知り、トリスタンを殺してその復讐を誓った。トリスタンとイゾーデはフランスに逃げて、そこで最終的に彼らは絶対的な愛を奉獻しようと心中を犯したのであった。

これら2つのイギリスの伝説は、13世紀の南フランスの吟遊詩人の伝統とつながっている。これは純潔の愛にもとづいた男性の女性に対する好意の伝統である。高貴な男性は美しい女性と恋に落ちても、性行為をするべきではない。そのような伝統では、美しい女性は高貴な男性によって崇拜されるべき神の女性像と考えられている。この伝統はキリスト教に肯定的な方向で、特に女性への敬意ということに関して、影響を与えてきた。さらに深く分析していけば、そのような伝統が創世記第三章の墮落からの復帰と関係があることは明らかである。人間の墮落は実際、神の愛に対する裏切りであった。

へびに表されている天使長ルーシエルがエバを誘惑し、ある種の性愛へと先導した。しかしエバはアダムの配偶者になるべく運命付けられていたし彼らは共に、人類の理想的な祖先になるべきであった。美しい女性と恋に落ちても性行為は断つべき高貴な男性は、アダムに仕えることになっていた天使長の使命を復帰しているのである。そのような伝統は明らかにイエスの時には見られなかった。第二アダムとしてのイエス自身は第二エバとしての完成した女性に出会うべきであったと考えるのが道理にかなっていることである。そしておそらく、救世主（メシア）にふさわしい配偶者を見つけるのは、天使長的人物としてのバプテストのヨハネにかかっていた。。しかしここではこれ以上このような仮説に深入りすることはできない。

神の愛とサタンの愛

アウグスティヌスの強力な影響のもとに、キリスト教は神の愛とサタンの愛の非常にはっきりした違いを示した。アウグスティヌス自身は、カトリックに改宗する以前に、女性との性愛に多に関わっていた。心理的に考えれば、アウグスティヌスが自身の過去の人生を強く否定していたことから、アウグスティヌス主義者が性愛を悪として拒絶することは理解できる。しかしアウグスティヌス自身でさえ、自分が愛した全ての女性を通して神を愛したということを認めていた。彼の有名な「私は愛することを愛した」という言葉は、ロマン主義の伝統のキーワードになった。それにもかかわらず、カトリック教会はあらゆる選択肢の中から、アウグスティヌスの性に対する禁欲の方を採用した。

「サタンの愛」という概念は、神が愛の唯一の源のはずであったがゆえに、実際非常に逆説的なことである。実際、サタンの愛とか悪魔の美とかいうようなキリスト教の概念は、創世記第三章の墮落の物語を深刻に受けとめてはじめて意味をなす。創世記によればアダムとエバはエデンの園という楽しく幸せな場所に純潔な存在として創造された。神は彼らに善悪を知る木の実以外ならどんな木からも実をとって食べてもよいと認めていた。神は男と女にこの木の実をとって食べるときと死ぬであろうとさえ言われた。しかしエデンの園の知的な動物として描写されているへびは、禁断の果実を食べても死ぬことはないと言った。神は人間が神のようになるのを妨げるためにそのようなそをついたとへびはエバを納得させた。へびの言葉にそそのかされて、エバは美味しそうに見えた禁断の果実を食べ、そしてアダムのところにもって行ってその実を分けた。しかし後に、彼らの目は開かれ、裸であることを意識していちじくの葉で自分たちの生殖器を隠した。アダムは恥ずかしく感じて神の目から隠れようとした。しかし神はアダムとエバが神にそむいたことを知り、神は彼らをのろって楽園から追い出した。

この物語を、多くのキリスト教徒と同じように、文字通りの意味で捉えるならば、愛とは何ら関係のない非常に奇妙な神の概念を受け入れなければならない。愛なる神がそのような誘惑を自身の未熟な子女たちに与えることができるだろうか。またヘビがそのかしてエバの信頼を裏切ったことについてはどうだろうか。実際、墮落の物語は象徴的に記されたものではあるが、その意味を推測するのはさほど難しいものではない。その本当の意味を知るためにその物語にある用語を続けて考えてみよう。知るの木の実とは明確には性愛の象徴のことである。植物にとって実は再生産の道であるのに、他方において禁断の果実を食べたら生殖器を隠さないといけないのだろうか。ヨハネの黙示録 12 章 9 節に、地に墮ちた竜、年老いたヘビ、すなわち悪魔と記されてヘビの正体が明らかにされている。事実、そのヘビは墮落してサタンとなった知の天使長ルーシエルの権化である。そして同時にそのヘビは、知のシンボルであり、男性である。結局、人間の墮落とは、ルーシエルとエバとのある種の霊的な淫行とそれに続くアダムとエバとの間の未完成期における性行為であったと認めざるを得ないのである。

しかし、天使長のような存在が自分の創造主である神を裏切ることがどうしてできたのだろうか。その問題に対する唯一可能な解答として再度繰り返すならば、愛の詐欺ということにある。神は、人間を子女として創造する前に、ルーシエルの統率のもとに天使を創造した。ルーシエルは自分の位置を人間の位置と比べて神から愛が不足しているという間違った感情を抱いた。それからルーシエルは神を憎み始め、あらゆる限りの手段をつかってでも神の理想を破壊しようと決意した。その時点ではルーシエルはまだ悪魔ではなく心が乱れていたということである。神に復讐する方法は、神の子女の愛、とりわけエバの愛を奪うことであった。実際、ルーシエルが神の愛の恩恵で驚くほど自然に美しく輝いてるエバと恋に落ちたと信じることは不合理なことではない。これがおそらくカトリック教会でつねに女性が悪魔に近い存在だと嫌疑をかけられてきた理由である。。。そのような罪の恐ろしい結果として。魔女に対する宗教裁判の最も大きな罪は悪魔との性交であった。

参考文献 : The Holy Bible- Saint Augustine, Confessions- J. Weston, The quest of the Holy Grail.

第四章：キルケゴール哲学における神の愛

「神は愛である。。。どれほど神は苦悩しておられるかをあなたは想像すらできないだろう。なぜなら神は苦悩があなたをどれほど傷つけるのかを完全に知っておられるからである。しかし神は変わることはできない。変わってしまえば神は愛ではなくなってしまふからである。」

——セーレン・キルケゴール

デンマークの哲学者セーレン・キルケゴールは、神の苦しみについてははっきりと語った第一人者である。キルケゴールは、愛の神の存在を信じるならば、人類の苦難ゆえに苦しむ神の存在もまた信じなければならぬと理解していた。実際、キリスト教の信仰の公式声明では神が苦しみ得るという概念は否定される。キリスト教神学によれば、神は全能であり、全能なる存在が苦しむことはあり得ない。したがってキリスト教の神の愛の概念は非常に抽象的なものにとどまっている。キルケゴールは哲学における抽象観念に対して敵愾心を抱いている。いわゆる「実存主義の父」としてキルケゴールは、思想家は何か他のものである前に人間であり、思索する前に生きていると信じている。ところで、キルケゴールは意識的に自分の思想の基礎を自身の伝記に置く最初の哲学者であり、これは全思想史において革命的なものである。デンマークの哲学者は自分の思想の基礎を特に神とのつながりの中での愛の物語に置くのであり、これは神の愛についての本研究にとって意味のあるものである。

キルケゴールの伝記、レギーネと神

セーレン・キルケゴールの人生は愛や神と密接につながっている。彼が哲学者になったのは2つの大きな障害による。キルケゴールにとっての第一の障害は、非常に信仰深いキリスト教徒であった父から神を否認することを学んだことであった。後に父は、妻と7人のうち5人の子供の死のゆえに神にのろわれたと感じるようになった。セーレンは、父が女中と再婚して生まれた末っ子であった。こういったことはキルケゴールが聖書のアブラハムの物語に非常に興味をもっていた理由の一つではなかろうか。実際、若井キルケゴールは家族に対するこのようなのろいについて罪を感じており、これにより彼は人生を非常に悲観的に見るようになった。しかし、この「精神的なのろい」は、ビジネスで成功した父から多くのお金を相続して物質的に恵まれ祝福されたことによって補われることとなった。その後、キルケゴールは第一級の生活をするようになった。その生活とは、彼が後に実存の美的段階と呼んだものであり、美やロマンティックな愛を求めていく生活である。それから彼の人生の第二の障害が起こった。それは、レギーネ・オルセンへの愛と、彼女と結婚する直前の決裂である。その決裂の深い理由はまだ謎のままであるが、キルケゴール自身によれば、神への愛か女性への愛のどちらかを選択しなければならなかったということであった。自分の選択行為を正当化するために、

キルケゴールはレギーネの宗教的理解の欠如を引き合いに出したのだが、彼はその弁解の重要性にそれほど自信があったわけではなかった。同時にキルケゴールは、レギーネの心を傷つけてしまったことにとっても罪悪感を感じており、それを癒すためにもこの話の内容について多くを記している。著書の中で特に「あれか、これか」は、キルケゴールがレギーネとのその愛の物語を深い哲学的かつ精神的分析と結びつけて書かれたものである。後に、彼は日記の中で、真に神を信ずるならば、レギーネ・オルセンと結婚すべきであったと打ち明けている。1855年、キルケゴールは、レギーネ・オルセンが総督になった夫とともにデンマークの植民地に行ったことを知ったことは第三の障害であった。それはキルケゴールを死に至らせたものである。11月11日、彼は42歳であった。キルケゴールはどういうわけか、自分はレギーネへの愛か神への愛かどちらかを選択しなければならないと感じていた。しかし彼は自分の選択に対する確信があまりなくて、レギーネを苦しめたことに対する罪を感じていた。自分自身の苦しみの心を通してキルケゴールは、人間の墮落以後、それ以上に神はどれほどはるかに苦しめられたことかと感じることができた。キルケゴールにとって墮落は、神と人間とのとても悲しい愛の物語のようである。この物語のもっと悲惨な点は、実際はレギーネはキルケゴールを真に神へと出会わせる最も重要な道であるのに、彼は彼女を神と自分との間の霊的な障害というふうに思ったことである。それゆえ晩年にキルケゴールは、自分が真の信仰を持っているならばレギーネと結婚していただろうと言明したのである。

キルケゴールとアブラハムの物語

キルケゴールには聖書の教養がとてもあり、自分の思想を説明するのにつねに聖書の物語をいくつか引用していた。特にアブラハムは旧約聖書で好きな人物でありなぜかキルケゴールにとってはイエスよりも重要な人物でさえあった。キルケゴールは特に「おそれとおののき」というイサクのいけにえの物語について著書を残した。彼にとって、この驚くべき物語は神を真に信仰するということの普遍的なキーポイントである。アブラハムに自身の息子イサクを供え物として捧げよと神は完全に不可能なことを命じた。愛の神が人間に信仰を試すために自身の息子を殺すように要求することは全くナンセンスなことである。何ゆえにイスラエルの神がアブラハムのような信仰者にイサクをいけにえにするよう命じることができたのであろうか。これは、アブラハムが神からこの命令を聞いてほとんど愚人になったとキルケゴールが考える理由である。何ゆえに神はアブラハムに、何者も、まして自分の子さえも殺してはならないという最も基本的な倫理原則を破るよう命じることができたのであろうか。どんな誤りを犯してアブラハムはそのような恐ろしい罰を受けるのだろうか。そして、そのような物語を聞いて神が愛であることを信じるのがいかにしてできるだろうか。キルケゴールは、これら全ての驚くべき問題に対して実際には答えていないが、彼は自分自身の人生と結びつけて非常

に興味深い解釈を示している。キルケゴールは、イサクのいけにえと自分自身のレギーネの供え物とを比較してみた。自分の父親が信仰を捨てたことに対する罪責ゆえに、キルケゴールはどこかレギーネへの愛は、神に許されるために払うべき代償であったと感じた。キルケゴールは、アブラハムが自身の信仰基台の失敗ゆえに深く罪を感じていたことをよく理解していた。それからアブラハムは、自分の失敗を克服するために、神により大きな供え物を捧げるべきだと感じた。これがキルケゴールによればアブラハムが信仰の祖と呼ばれるに値する理由である。アブラハムはよりいっそう困難なことを成す決意、すなわち自分の子を殺して神への驚くべき信仰を証そうと決意していた。アブラハムは、人類がこれまでとどまっていた人生の倫理的段階を突破して人生の宗教的段階へと突入する道を切り開いた最初の人であった。

キルケゴールにとって、レギーネはアブラハムにとってのイサクと同じ立場にあった。しかしその違いは、神が天使を送ってイサクを殺そうとするまさにその時にアブラハムの手を止めたが、セーレン・キルケゴールとレギーネ・オルセンとの別れを防ぐものは何もなかったことである。実際、キルケゴールはやがてレギーネとの愛の関係を回復することができると思っていたが、しかし彼女がフレデリック・シュレーゲルと結婚したことを知るようになった時この愛は崩壊したのであった。その瞬間、キルケゴールは神への信仰を失いそうになったが、「信仰への突破」で自分の気持ちをできた。キルケゴールは、自分はアブラハムではないということ、だから神はあの時と同じことはもう成されないと悟るようになった。キルケゴールは、愛なる神は無条件に与える神であり、決して自分にレギーネへの愛を犠牲にするように命じたりするような神ではないということを知ることになった。アブラハムは神の不条理な命令に従うことで「信仰への突破」を成したのであり、キルケゴールは、独身の哲学者としての自由を犠牲にして、結婚へと踏み切ることによって「信仰への突破」を成すべきだったのである。すでに、男性が女性への愛を犠牲にすることは非常に困難なことである。しかしそのような犠牲をなして、神はそのようなことを決して命じてはいなかったと後になって悟ること以上に困難なことはない。キルケゴールが絶望して自殺をしようとしたことは理解できることである。キルケゴールが自分の間違いを悟ったという証拠は、「結婚の美的正当性について」という結婚の深い価値についての彼の美しいエッセイにある。キルケゴールが結婚は神の愛が宿ることのできる理想の場であることを悟ったのはあまりにも遅すぎたのである。

神の愛と自由、苦悩

主著の一つである「不安の概念」の中でキルケゴールは、人間の墮落と関連づけて、彼自身の創世記第三章の解釈を示している。基本的にキルケゴールは、ヘビを悪魔と見、禁断の果実を性愛と見るアウグスティヌスの考え方に同意している。しかしキルケゴール

ルは、そのような信じられないような内容の心理的背景をもっと深く知りたがっていた。キルケゴールは愛なる神がそれほど危険な木をエデンの園に置くというようなことはどこか間違っていると感じていた。子供はつねに禁止されたものに引き付けられるものだということを彼はよく知っていた。このことは、子供の心の中の邪悪さから起きるものではなくて、自分たちの自由を試そうとする本来の欲望の結果である。しかしキルケゴールにとって、自由というものは苦悩がなければ出てこない。彼によれば、アダムとエバは生命の木の実をとって食べるべからずという神の命令で苦悩していたのであり、墮落を犯す以前でも罪の意識を感じていたのである。それでアダムとエバは状況的に優位な立場にあったヘビによる悪なる誘惑に抵抗するには弱い立場にあった。そのヘビは天使長ルーシエルを表す非常に興味深いシンボルである。ヘビはまた同時に知恵と男性のシンボルである。動物としてヘビはまた苦悩の完全なシンボルでもある。獲物を窒息させて絞め殺すヘビもいれば、獲物を目で驚かして動けなくして殺すヘビもいる。苦悩は同時にまた窒息という肉体的な感覚とめまいという心理的感情である。そして誘惑とは、禁止されていることを拒絶すると同時に願望するある種の霊的なめまいではないだろうか。

しかし神にはアダムとエバにこの命令をすること以外の選択肢はなかった。そうしなければ彼らは自分たちの自由を試せなかつただろうし、正式に人間にもなれなかつただろう。彼らには、その誘惑を否定して神に従う自由があつたが、しかし不幸にも彼らはヘビの勧告に従う道を選んでしまった。そのような説明でもってキルケゴールは神が愛であるという概念を保護する。一般的にキリスト教神学では、墮落は必然であつたと考えられており、アウグスティヌス自身、「そのような救世主（メシア）の到来を必然的なものにした好都合な墮落」と断言した。キルケゴールはそのような神の愛に反対するような概念を徹底して拒絶している。神は愛であるがゆえに、神はアダムとエバを神をも裏切ることができる自由な存在として創造した。しかしこの裏切られるような危険性は愛のための代償である。誰かを愛する時、その人を物として扱うことは決してできないからである。真の愛というものはつねに愛する者を裏切りの可能性にさらすものであり、神にとってもまたその例外ではないのである。宇宙の創造主として神は、絶対的に全能であるが、しかし人間との関係においては神は絶対的に傷つきやすい。神は愛であるがゆえに、権力や何か他のもの以上に愛に価値を置く。これは最高で美しい神のパラドックスである。真の宗教的人生にはパラドックスに満ちているということをキルケゴールは理解している。

私が思うに、キルケゴールという人は、悲劇的な人生の現実にもかかわらず、神の愛の心情についてより深く理解していた思想家であつた。デンマークの哲学者の賞賛されるべき偉大なる点は、自身の哲学的著作を通して、自分の個人的な人生、とりわけ愛の

失敗までも直接さらけ出すほど勇敢である点である。それで、自分自身の苦悩を通してキルケゴールは真の愛を失った神の傷ついた心を深く理解することができた。しかし、キルケゴールが、神の愛を感じるのに挫折や罪の苦悩を体験しなければならなかったことは悲しいことである。いつの日か哲学者も喜びに満ちた愛の経験を通して神の愛を証言することができたらとても励みとなる素晴らしいことだろう。

参考文献 : Kierkegaard, Guilty - not guilty, Tel Gallimard 1975 - Frighten and trembling, Rivages 2000 - The esthetical legitimacy of marriage, Tel Gallimard, 1943

第五章：今日に至るまでの女性的な神概念

「谷間の精神は滅びない
それは神秘的な女性である」

——老子

第三ミレニアムの到来で、魚座の時代が過ぎ去り水瓶座の時代が来た。水瓶座は女性の価値をあらわすシンボルであり、したがって男性の時代が過ぎ去り女性の時代が来たと解釈することができる。一方、イギリスの歴史学者アーノルド・トインビーは、21世紀は精神的になるのではないだろうかと言った。21世紀は、ますます精神的になっているように思われる。中世のキリスト教心霊主義者 Joachim de Flore は、やがて人類は父の時代と子の時代を通過した後に聖霊の時代を迎えるであろうと言った。父の時代はモーセの律法に特色付けられる旧約時代の時代に該当する。子の時代はイエスの福音に特徴付けられる新約聖書の時代に該当する。それから聖霊の時代は、新しいエバの愛によって育まれる成約聖書の時代に該当する。

古代宗教の女神

キリスト教が392年に、国家宗教になってローマを支配するようになった時、ローマ帝国にはいまだ非常に多くの宗教信仰が蔓延していた。初期には、キリスト教徒はまだ、守旧迫害の恐ろしさを覚えていたので、キリスト教政権は他信仰にかなり寛容的であった。しかし、不幸にも、キリスト教の支配者が権力を欲してだんだん福音の精神にそむくようになり、他の宗教や哲学を迫害するようになった。461年のニケア会議はローマ・カトリック教会の暗黒の分岐点となった。男性的な力にもとづいて、非常にドグマ的な神学をたてたからである。神は王のように宇宙を支配する全能で男性的な創造主として定義された。そのような観点によりやがてミケランジェロはあごひげの老人の有名な絵を描いてバチカン宮殿の屋根を装飾した。神の女性的側面に対するどんな言及も厳しく

禁止され、異教徒か異端とみなされた。実際、これは聖書の観点からみてもナンセンスなことである。創世記では、神は自身の似姿として男性と女性を創造したとはっきり記されており、それは神には女性的側面もあることを明らかに意味するものである。また、ユダヤ神秘主義の伝統はヤコブの妻ラケルをシェキーナーという神の女性的側面になぞらえる。ヤコブの母リベカはヤコブがエソウの代わりにイサクの祝福を受けられるようにしたことで神の摂理にとっても重要な役割を果たした。聖書では、たいてい女性の方が男性よりも神側に立つ。ユダヤ人の中で、女性だけがモーセを変わず信じており金の子牛をつくるために必要な宝石類を差し出すのを断ったのである。他にも旧約聖書には、女性の方が男性よりも神の意志により敬意を払っていることを示している例が非常にたくさんある。また新約聖書にも、イエスは最後まで、より女性によって支えられてきたことが記されている。また十字架の後に、イエスの霊人体を見て、キリストの復活の知らせを広めたのも女性だったのである。

どこか聖書というものは、古い異教の女神のインスピレーションで、神の願いを果たす女性が記されているように思われる。非常に多くの有名な多神教の女神の中でエジプトのイシス(Isis)とインドのカリ(Kali)があげられる。なぜ他にもたくさんの神々がいる中で、この2人の女神について言及することを選択したかという、その理由としてまず第一に、イシスもカリも同じように、いくつかの新しい女性宗教の中心的な神となったからである。第二に、カリとイシスは女性の2つの相補的な側面を非常によく表しているからである。すなわち、カリは官能的で魅惑的な存在としての女性を表しており、それに対してイシスは、生命を与えかつ保護する存在としての女性を表している。

カリ— カリはヒンズー教の神々の中でも非常に重要な女神である。カリはヒンズー教独自の三大神の中でシバとビシヌユにつづく第三の神としてしばしばあげられる。カリは破壊と再生の女神として知られている。しかししばしばカリはまたダンスと性愛の女神としても表されている。それは、人生の循環は、性による創造と死による破壊とを繰り返すダンスのようなものであるという考え方からきている。カリはインドのタントラ教のいくつかの宗派における主要な神になった。フロイトもこの考え方を、人間の内には生への衝動エロスと死への衝動タナトスとの二元性があるという彼の最も深い洞察に適応させた。

イシス— イシスはエジプトの自然の女神である。イシスは太陽神ホルスの妻である。最も有名なエジプト神話の一つによれば、ホルスは邪悪な兄であるセツに体をばらばらに切断されて殺され二度と復活できないようにいろんな場所にばら撒かれた。しかしイシスのホルスへの愛が非常に深かったので、イシスは忍耐強く夫の死体を全部かき集めて、再び組み立てて、イシスの強い愛の力でホルスをよみがえらせたのである。イシスは愛する心をもつ理想的な妻の普遍的シンボルとなった。アレクサンダー文化時代のエ

ジプト文明崩壊後、イシスはイシス教団と呼ばれるある特定の宗教の信仰の対象となった。同時にこの女性的で愛に価値を置く宗教は、非常に急速にローマ帝国に広がり、それから最終的にキリスト教に吸収されることとなった。イシス教団はキリスト教に欠けている女性的側面をもたらしたのだが、キリスト教が強大になれば、イシスの信奉者たちは、キリスト教徒たちに迫害されるようになった。

カトリック教の聖母崇拝の意義

男性的な力にもとづいたギリシャ＝ローマ文化の影響で、ローマ・カトリック教会は一人の男性に顕現した男性的な神概念をもつ非常に男性的な宗教になった。パウロは、男性に比べると女性は劣っていると大いに強調していた一人であった。しかし476年アラリックによるローマ帝国崩壊後、ゲルマン民族がキリスト教に改宗するようになった。ゲルマン民族の宗教は女神信仰により女性をとて尊重するものであったので、彼らはキリスト教をより女性的な側面へと転換させた。徐々に中世において、イエスの母マリアに対して特別尊敬の念を抱くようなことがキリスト教の意識の中に広がっていった。女性は一般的に、南フランスの吟遊詩人の伝統やイギリスの円卓の騎士の伝説により信仰の対象になった。それでも、マリアによるイエスの処女降臨の概念がカトリック教の公式教義になったのは19世紀になってはじめてのことである。また無原罪の御宿りという教義が立てられたのはthe Pope Pie XIIを経て1950年になってはじめてのことである。この教義では母のアンナは誰とも性交せずにマリアをみごもっておりマリア自身は母の胎内に宿ったその瞬間から原罪を免れていたとされている。。。また、8月15日が聖母マリアにささげられた公式の聖日となったのも1950年である。そのような信仰教義がすばらしいものなのかばかげたものなのかどうとらえようとも、救い主が聖母から誕生したという考え方の心理的力は誰も否定できない。心理的視点では、聖母によるイエスの誕生というカトリックの概念は、キリスト教の神における女性的側面の欠如に対する重要な埋め合わせをするものである。イエスが神の息子だと考えるならば、マリアは神の妻であると主張することができる。イエスが神自身であると信ずるいくつかのカトリック教徒にとってはマリアは神の母の位置まで引き上げられる。スイスの心理分析学者カール・グスタフ・ユングは、プロテスタントの背景があるにもかかわらず心理学的な点ではそのような教義を認めていた。ユングはマリア崇拝は、一神教で忘れられていた神の女性的特性のある種の「リベンジ」であると説明した。どこかマリアには、昔からの有名な女神との多くの共通点がある。特にデメテルという大地の生産をつかさどるギリシャの女神があげられる。デメテルはあらゆるすべてのものを犠牲にしても行方不明の娘を探し出そうとするような母性としても有名である。マリアもまたヘロデ王が当時、生まれた赤ん坊を皆殺しにする計画のことを聞いて、イエスを救うために自分の生命を危険にさらした。いずれにせよマリアは、母性の最も有名なシンボルで

あり、ミケランジェロのマドンナのような非常に多くの絵画の傑作で称揚されている。しかし同時にマリアは有名な知恵の女神アテナといくらか似ている。アテナは男の誘惑を拒絶し、悪に対して妥協なく闘う聖母であることで有名である。黙示録についてのあるカトリックの解釈の中には、終わりの日に竜の頭をつぶすことになっているのは聖母マリアであるという解釈もあることを忘れてはならない。

ニューエイジの靈性における神の女性的特性

恐ろしい第二次世界大戦の後、男性的力の欠点が2人の「口ひげ男」、すなわちヒットラーとスターリンによってはっきり示され、西洋世界ではある種の転換がはじまった。60年代のニューエイジ運動の出現は、権力や争いといった「男性的な」価値観にもとづいた過去のモデルを拒否しようとする主な徴候の一つである。ニューエイジ運動はまた、女性的で生態学的な価値観にもとづく新しい靈性を促進する幅広い運動である。ニューエイジ運動には、東洋と西洋両方の昔からの精神的・宗教的伝統の諸原理が含まれており、その多くは現代科学の諸概念、特に心理学や生態学と併合してきた。ニューエイジは、組織化された構造というよりも自発的なものなので、それがいつ出現したものなのかを正確に示すのは難しい。それでも、マリリン・フェルグソンの1980年の出版物 *The Aquarian conspiracy* は、マス・メディアの観点からニューエイジ運動をもたらしたものとして考えられる。

ニューエイジ運動は、権力や服従といった男性的原理にもとづくキリスト教文化に対する代案を示すものである。この運動は、優しさや寛容といった価値観にもとづく女性的靈性をはっきりと主張する。ニューエイジ運動の主要概念の一つは、例えばグノーシス主義の女神イーオン・ソフィアのような神の女性像も含めて、靈性の女性形態は、総大司教の宗教、すなわち神聖なる教義として認可されて広く奉じられた宗教に従属し、隠れて信仰し、あるいは虐げられてきたということである。したがってこの女性的神概念を復活させようとする態度から、なぜニューエイジ運動が東洋哲学、さらには特に、道教やタントラ教にかなり焦点を当てるのかが理解できる。道教やタントラ教は道(Tao)や神(the Divinity)に到達するために女性的特性や女性の力に重要な役割を与えている。歴史的に見て、ニューエイジ運動の高まりには、明らかにネパールのカトマンズへの「巡礼」でもって起こった70年代のヒッピー運動のみちぞなえがあった。またベトナム戦争の時の「戦争ではなく愛を」という有名なスローガンを特に支持していたのは、荒廃した国で恋人を失うことにうんざりしていたアメリカの少女たちであった。今日、イラクに対する平和運動がカリフォルニアの女性たちから始まったのも偶然なことではない。実際、ニューエイジ運動は作家のアルダス・ハクスリーや、人類学者のカルロス・カスタネダ、歌手のカルロス・サンタナのような人々によってカリフォルニア

に最も成功的に広がった。ところで、言い伝えによれば、かつてカリフォルニア中にはスペイン人の征服者によって「発見」されるまでアマゾン族が生活していたことを知っておく必要がある。

参考文献： Marylyn Ferguson, *The Aquarian Conspiracy - Kerenyi, Goddesses of Sun and Moon* - J. Weston, *The quest of the Holy Grail*

黙示録

「慈悲や愛、哀れみのあるところには神もまた宿られる。」

——ウイリアム・ブレーク

「神は愛」この言葉の真理をより論理的に理解できた今、しかしながら現実の世界が神の愛の理想からいかにかけはなれたものであるのかも理解して驚かざるを得ない。悲惨なことに、中世暗黒時代と同じように、いまだに、神の名において互いに殺し合うという現実がある。狂信者たちが自分たちの宗教精神にそむいているのだとしても、そのような恐ろしい逸脱は、伝統的な一神教にどこか間違いがあるということをはっきりと証明しているのである。もちろん、ユダヤ教もキリスト教もイスラム教もみな神は愛なる神であるとはっきり断言している。しかし問題は、その断言はあまりにも抽象的なままにとどまっているということである。愛なる神を語る場合、その理解すべきことがらの論理的説明が欠けているからである。実際、その三大啓示宗教の神学者たちは神の愛の概念ではなく、神の力の概念を優先させてきたのである。論理的には、神は全能であるという概念と神は愛であるという概念を一つにするのは容易なことではない。悪の实在が神の力と愛の統一を妨げているからである。フランスの作家アルバート・カミュが述べたように、悪を前にして我々は、神の力と神の愛のどちらかを選択しなければならない。神が実際、全能であるならば、悪の实在によって、愛が欠けていることが明らかになり、神が実際、愛であるならば、悪の实在によって、力が欠けていることが明らかになる。カミュのこの論証は、完全には同意できるものではなかったとしても、全くでたらめなものでもないと思えざるを得ない。私の観点では、愛は神の最も本質的な性質であり、他の全ての属性に優るものである。神は愛であり、また永遠性や力、知識といった他の属性を持つ。しかし神が全能だということは論理的におかしい。つねに力には限界があるからである。これはユダヤ人哲学者ハンス・ヨナスのエッセー「アウシュビッツ以後の神の概念」における説得力のある命題である。彼にとって神の力は神の愛によって制限される。そして神の愛は、人間の自由がひどい犯罪に向かう可能性があっ

でもその人間の自由を尊重することを意味するのである。

The complex of God という著書の中に私自身の哲学的命題を展開させたのだが、その中で私は、全能の神という概念はある意味、病的な概念であることを示そうとした。人間は自由の中に神の愛が込められていることをはっきり主張できなかつたので、自分の代わりに全てを決定する全能の神という概念をつくった。しかしやがて、反抗する子供と同じように、人間は神の支配を拒絶するようになって、ずうずうしくも絶対的な力を引き継ごうとして絶対者のように思い込むようになった。これが私が神のコンプレックスと呼んでいるところの「精神病」である。そしてこれは西洋文明特有の病気である。。。